



国土地理院に遊びに行ったら「くにかぜ」と書かれたカッコイイ飛行機を見かけたよ。

あれは、初代「くにかぜ」！空から測量するための飛行機で、全国各地の空を飛んでいたんじゃ。



～初代「くにかぜ」って、どんな飛行機？～

初代「くにかぜ」は、国土地理院が地図を作成するために昭和35年（1960年）に導入した飛行機です。この飛行機は、米国の小型飛行機メーカー（ビーチクラフト社）が、民間機用として製作した2号機を、日本で写真撮影用に改装したものです。当時、この種の飛行機としては、2つのエンジン、車輪が引き込み式など最新式の機器を備えていました。

また、昭和58年（1983年）に、後続機「くにかぜII」に任務を譲り退役するまでの飛行距離は約23万km（地球約5周半）、飛行時間は延べ7,600時間に及びました。

～空から測量？～

私たちが使っている地図のほとんどは、上空から、地上の正確な位置が測ることができるように撮影された写真をもとに作られています。このような写真を「空中写真」といい、正確な地図作成や街の移り変わりを知る上で欠かせないものとなっています。国土地理院では、国土の変化の把握や災害時の被災状況を迅速に把握するための専用の飛行機として、今は三代目となる「くにかぜIII」を運用しています。

～どうやって撮影するの？～

空中写真は、飛行機の底に下向きに取り付けられた撮影専用の航空カメラから地上（真下方向）を撮影します。

撮影方法は、標高や建物の高さを測量できるように、1枚1枚の写真が重なり合うように連続して撮影します。一つのコースの撮影が終わると、進行方向を変えて次のコースの撮影に移ります。

最近では、4Kや8Kの高画質映像のことをよく耳にしますが、現在運用しているくにかぜIIIの航空カメラは10K以上の細かさで撮影することができます。また、地上約3000mの高度から撮影した場合、1枚の写真に広さ約3km×3kmの範囲が写り、最も拡大すると地上概ね20cmの大きさのものを見分けることができます。

（基本図情報部）



くにかぜIIIと下から見た航空カメラ（拡大）
※撮影しないときには窓穴を閉めています



空中写真の撮影方法